卒業論文

地元志向の勤務地重視度への影響
――大学生の就職活動を対象として――

平成 23 年入学

文学部　人文学科

社会学・地域福祉社会学専門分野

平成 27 年 1 月提出

要約

本論文の目的は、地元志向についての大学生の認識や、就職活動の際地元志向かどうかが、企業を選ぶ際の勤務地の重視度にどのような影響を与えるのかを明らかにすることである。

これまでの地元志向についての研究は、そもそも地元志向という言葉の定義が曖昧であった。そのため今回はまず、実際に就職活動を終えた、または控えている学生自身に地元志向の認識をたずね、地元志向にどのようなイメージを抱いているのかを分析した。次に地元志向を考える際には、企業を選ぶ際の勤務地の優先順位（例えば企業選びで重視するのは、１位業種　２位社風　３位勤務地）と、勤務地の中での地元の優先順位を区別する必要があると考えた。そこで「勤務地自体の優先順位」と「勤務地の中での地元の優先順位」を分けてそれぞれについてたずねた。この点でこれまでの研究との差別化を図っている。先の研究では、地元志向は企業を選ぶ際の基準として勤務地を元々優先している人が前提になっている、もしくは他の労働条件との兼ね合いを無視して、単に勤務地として選ぶなら地元である人のどちらかを対象にしたものであったからである。

第１章では、はじめに現在の就職活動の状況について整理している。就職活動の現状を企業の制度・就職活動のスケジュールの改正・就活生の意識の点から述べている。就職氷河期であった時代から、現在は学生の「売り手市場」に変わり、以前よりも学生優位になっている。そのため就職氷河期時代の「就職できればどこでもいい」という考え方から、業種や職種に加えて、勤務地や福利厚生などの生活環境を重視し、「個人の生活と仕事を両立させたい」という考え方が増えてきている。次にこれを受けて、最初の問題設定を行っている。

第２章では、先行研究について述べている。まず「地元志向」を考える前に「地元」の定義や範囲について考える必要がある。なぜなら「地元」の捉え方が人によって違うからである。「地元志向」について調査をする際に、調査者側と回答者側で「地元」の捉え方が違っていたり、定義や範囲が一定でなかったりすると、「地元志向」の調査の結果も違ったものになってくる。そうならないため、先行研究を用いて「地元」について定義づけしている。次に「地元志向」についての研究を挙げている。「地元志向」のタイプ分けや要因、「地元志向」と就活について述べている。最後に就職活動と社会的背景についてである。現在の学生の就活観の変化には、企業の制度面の充実だけではなく、終身雇用制度の崩壊

や男女雇用機会均等法の改正などの社会的背景も関連していると考えられる。

第３章では、今回行った調査について述べている。まず調査を始めるにあたっての課題について３つ挙げている。１つ目は、場所によっては地元に自分の行きたい企業がなかったり、支店や支社がなかったりする場合があり、その場合はそもそも地元志向になり得ないということである。また業種や性別によっても同じことがいえる。２つ目は、先に述べたように、地元志向というのは「勤務地自体の優先順位」と「勤務地の中での地元の優先順位」を区別して考えなければならないということである。３つ目は、潜在的な地元志向である。業種や性別によって勤務地が制限されると、その先の地元で働くという選択肢がなくなってしまうこともある。地元で働きたいという思いを持ってはいるけれど、現状の就活の制度ではその思いが制限されてしまう場合がある。これが潜在的な地元志向である。これはいまだに全国転勤の職種が多い男性に多数いると考えられる。

これら３つの課題に対して今回の調査では、企業を選ぶ際の基準を聞き、その中で勤務地を重視しているのかということと、もし勤務地以外の労働条件が変わることなく、勤務地を全国から自由に選べるとしたら地元を選ぶのかということを区別して聞くという方法をとっている。この方法を用いて、勤務地以外の労働条件に縛られない場合、地元志向の学生はどれくらいいるのか、また地元志向が勤務地の重視度へ与える影響を調べる。次に本調査用紙の作成の参考として、聞き取り調査を行い、その内容を記述している。そして本調査方法の設定では、量的調査という調査方法を選んだ過程や理由について、変数の設定では、従属変数２個と独立変数４個を設定し、それぞれについて説明を加えている。それらをもとに仮説を設定し、最後に本調査の概要として、調査実施内容や質問項目を記述している。

第４章では、分析・考察を行っている。分析は分析方法別に大きく３つに分かれている。１つ目に、単純集計を用いて学生の地元志向についての認識と勤務地として地元を選ぶ要因の分析を行った。２つ目に、重回帰分析を用いて従属変数である地元志向のイメージと勤務地重視度に影響を与える要因を調べた。この分析によって、性別や文理、出身地方などの独立変数によって、地元志向のイメージや勤務地重視度に違いが出てくるのかを見る。３つ目に、クロス表分析を用いて、勤務地の中での地元の優先順位に影響を与える要因と地元志向が勤務地重視度へ与える影響を調べた。これらの分析の結果明らかになったことは以下の通りである。

単純集計の結果では、地元志向についての学生のイメージは、「勤務地以外のいくつかの

労働条件を犠牲にしてでも地元で働きたい」と、「勤務地以外の労働条件を犠牲にはしないが、勤務地が自由に選べる状況にあった場合には地元を選ぶ」が同じくらいの割合で、この2つで全体の約9割を占めた。一方、業種や給与などよりも勤務地を最優先にして、なにがなんでも地元で働きたいというイメージを持っている人はわずかであり、学生は地元志向というものを比較的広く捉えていた。次に勤務地として地元を選ぶ要因は、「実家があるから」「地元が好きで貢献したいから」が多く、地元を選ぶ理由が明確である人が多数であった。逆に「他の土地に行きたくないから」と消去法的に地元を選ぶ人は少なかった。

重回帰分析の結果では、地元志向のイメージに影響を与える要因として性別が挙げられた。分析の結果、男性の方が地元志向を比較的広い範囲で捉えていた。具体的には男性の方が、勤務地以外の労働条件をあまり犠牲にせずとも、勤務地として地元を選ぶ場合、それは地元志向と言えると思っている人が多いということである。次に勤務地重視度に最も影響を与える要因として、出身県が挙げられた。福岡県出身者は他県と比較して勤務地重視度が高かった。つまり福岡県出身者ほど、企業を選ぶ際の基準として勤務地をより重視する傾向にあるということである。一方で、性別・文理・出身地方はその影響は小さかった。

クロス表分析の結果では、勤務地の中での地元の優先順位に最も影響を与える要因として、出身県が挙げられた。福岡県出身者は他県と比較して、勤務地として地元を選ぶ人の割合が多かった。一方で、性別・文理・出身地方はその影響は小さかった。よって勤務地重視度と勤務地の中での地元の優先順位、それぞれに最も影響を与える要因は出身県（福岡県）であることが分かった。つまり地元志向に最も影響を与える要因は出身県であり、福岡県出身者ほど地元志向が強いことが分かった。また地元志向が勤務地重視度へ与える影響に関しては、勤務地にどこを選ぶかで勤務地重視度に違いはでなかった。学生は企業を選ぶ際には、勤務地よりも業種や社風、給与を優先する傾向があった。

第5章では、本論文のまとめと全体を通しての反省点、今後の展望について記述している。

目次

第１章　　はじめに

1－1．就職活動の現状　・・・・・・・1

1－2．問題設定　・・・・・・・2

第２章　　先行研究

2－1．「地元」とは、「地元志向」とは　・・・・・・・3

2－2．地元志向と勤務地選択　・・・・・・・5

2－3．就職活動と社会的背景　・・・・・・・6

第３章　　調査と変数の設定

3－1．調査を始めるにあたっての課題　・・・・・・・7

3－2．聞き取り調査　・・・・・・・10

3－3．調査方法と変数の設定　・・・・・・・21

3－4．問題の再設定と仮説の設定　・・・・・・・26

3－5．本調査の概要　・・・・・・・31

第４章　　分析と考察

4－1．地元志向についての認識と勤務地として地元を選ぶ要因　・・・・・・・34

4－2．地元志向のイメージに影響を与える要因　・・・・・・・36

4－3．勤務地重視度に影響を与える要因　・・・・・・・37

4－4．勤務地の中での地元の優先順位に影響を与える要因　・・・・・・・40

4－5．就職希望地が勤務地自体の優先順位へ与える影響　・・・・・・・44

第５章　　まとめと今後の展望　・・・・・・・46

おわりに　・・・・・・・48

参考一覧　・・・・・・・49

付録１　本調査用質問票・単純集計